

商売繁盛 の縁起物



片前足をあげて座った猫の像。張子製と陶製があり、客を招き寄せるとして商家の店頭で目につく場所に飾られる。右前足をあげたものは金を、左前足をあげたものは人を招くとされる。



禅宗の開祖・達磨大師の座禅姿を模したもの。福だるまは「不倒翁」の泥粘土人形や起き上がり小法師と結びつき、七転び八起き縁起物になった。黒色のだるまが「黒字を招く」とされ、商売繁盛祈願に用いられる。

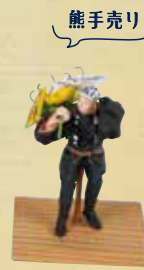


童顔の大頭にちょん髷、袴姿で正座する焼き物や張子の人形。文化元年(1804)には江戸で流行した。京の呉服屋で一代で長者になった頭の大きな小男や、商売上手で大頭姿の新吉原の妓楼の主人などがモデルとされる。



熊手に初穂や種々の縁起物を飾りつけ、11月の鷲神社の酉の市で売られる。熊手が「金運や福をかき集める」鷲の爪に似るため「運を鷲つかみにする」とされ、金運が商売繁盛と結びついた。

商いと物売りのミニチュア



風鈴屋

鋳物・ガラス・陶磁製の風鈴を売る、江戸時代の初夏の風物詩。風鈴の涼しげな音色が響くため、売り声をあげることは少ない。風鈴は近年まで魔除けの色とされる赤が多かった。

虫屋

堂が一番の売り物で、こおろぎ、松虫、鈴虫、蟬など声を鑑賞する虫を売る。虫がこは江戸のものは細かく、扇形、舟形などいろいろなかごがあった。屋台を道において売り、あまり売り歩かなかった。

商家・ 商店街 の風景



八百屋の八百宗
(東中野2丁目 昭和2年)



藤乃木パン
(野方 昭和8年)



中野北口美観商店街 第1回商業まつり
(中野5丁目 昭和29年)



大特売でにぎわう新井薬師の縁日
(新井 昭和33年)



金魚屋さん
(中野5丁目 昭和41年以前)



家政銀座商店街 仮装行列
(若宮 昭和42年)



住宅地を回る御用聞きの米屋
(野方か 昭和49年)



川島通り商店街
(弥生町 昭和49年)



白鷺団地近くのマーケット
(若宮2丁目 昭和50年)

明治半ば以降になると、個人商店や商店街の様子が写真に写される。個人商店では開業祝いの折に写されたものが多く、商店街は中元やセール、福引でにぎわう風景が見られる。大型のスーパーマーケットなどが登場する前の商家や商店街では、現在よりもずっと細分化された商いをしていた。

館蔵品展

商いと 商店街

2025 12.2日 → 2.8日

REKIMIN



山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

商いの 始まりと お金



江戸時代から大正時代ごろに主に商家で使われた小銭を入れる木箱。鉄箱とも書き、金庫や貯金箱の役割をした。桎や杉などの丈夫な木材で作られ、直方体で錠がつけられる。上部に銭を入れる穴があげられ、銭を投げ入れるのに便利(じょうてい)ように漏斗形の投げ入口をもうけたりした。



計量するものを載せる台がついた秤。軽量物用から重量物用まで各種ある。当初は分銅を利用して、のちにバネを利用して針で表示するようになった。現在はデジタル式の秤が店頭で使われている。



商取引用はかりの検査
(区役所 昭和32年)

商店や病院などで使われる秤は2年に一度、定期検査を受けることが義務づけられている。

商品や娯楽、さまざまなサービスの対価はお金(通貨)。江戸時代には変動する通貨の重さを正確に量るための秤、お金の計算や保管、商品の重さから価格を計算する道具が必須だった。姿は変わり、デジタル化されても機能的には変わらないものが今日でも使われている。



そろばん
(算盤)

軸におした珠を移動して加減乗除する計算用具。初期は梁上2珠、梁下5珠だったが、梁上1珠、梁下4珠が普及し一般的になった。このそろばんは「番頭そろばん」と記され、番頭が使用していたものと推測される。



銭ます

硬貨を計量する道具。柄つき板の表面に硬貨の大きさに合わせた縦横の仕切りがつき、そこに小銭を1つずつ納め、50、80、100枚などの小銭が一度に数えられる。金融・両替商をはじめとする商家には必須の計量器だった。



商人七福神
ほてい

(豊原岡周 慶應2年(1866))

七福神をかたどった商人姿の浮世絵。ほていが持つのは銭ます。左手の巾着風の財布は、ほていが担ぐ食べ物がつきないとされる不思議な袋をイメージさせる。

近世から 近代の 商い



ヤマサ醤油のポスター

中野区南部を東西にのびる青梅街道沿いで発達した醸造業のひとつの醤油屋。明治5年(1872)に浅田政吉が山政醤油醸造場を創業、屋号は「政(ヤママサ)」。海外にも販売された。



新井薬師の縁日の盛況
(明治35年頃)

新井薬師は古くから子育薬師、眼病に利益のある治眼薬師として知られる。大正時代から昭和10年頃は8日と12日に縁日がおこなわれ、露店が出た。明治17年(1884)に中野村で創業した浅田麦酒会社の「浅田ビール」の(のぼり)幟が写る。



青梅街道沿いで発達した醸造業のひとつの味噌屋。明治18年(1885)に飯田又右衛門が飯田味噌醸造所を創業、屋号は「油又(あぶまた)」。



野方の薬屋 (大正15年)

看板が大きく日よけもあり、正面をすべてガラス戸にして採光に気配っている。当時としては大胆なつくりだった。



鶏肉王子問屋玉手山の看板

青梅街道筋は、大消費地である江戸への物資を運ぶ交通路、また神社仏閣への参詣道として発展。行きかう人々を相手に店がたち、幕末から明治にかけて醸造業が発達した。また明治22年(1889)甲武鉄道(のちのJR中央線)の開通で、中野駅周辺には軍の施設があかれ、商店が増えた。また食料品の移動販売、日用品の修理、季節ごとの行商人や芸人もあつた。



配置置き薬箱

富山の広真堂の置き薬箱。「越中富山の薬売り」として知られる売薬商人は薬を先に使い(先用)、代金(利)をあともう(先用後利)といわれる販売方法で日本各地の得意先に新しい薬を届けていた。この薬箱は昭和50年代まで使われていた。



高木商店 (大和町 大正15年)

精肉店の新築祝い。店主は右から2人目。現在でも高木精肉店として営業している。

商店街と 商売道具・ 宣伝



キャッシュレジスター

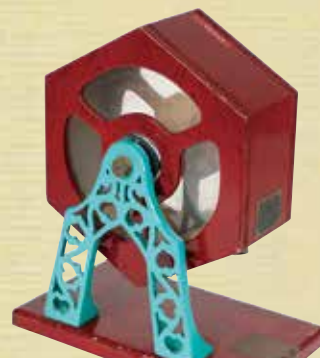
(沼袋 昭和27年)
明治42年(1909)に青梅街道沿いの本町で創業、戦時中に沼袋へ移転した山田屋呉服店で10年ほど前まで使われていた。日本ナショナル金銭登録機株式会社が発売したもので木目調に塗装されている。



ふとん店は杉並区だが、工場は大和町の大和小学校(※)そばにあった。寄贈された包装紙は隣接の杉並区、新宿区の商店や百貨店のものが多い。



江戸時代から大正時代にかけて、商店の開店や商品宣伝、売り出しの際に配った紙札。今日のピラやチラシにあたり、客を引き寄せる意味で引札とよばれた。販売繁盛と結びつていびすと大黒天がよく描かれた。



回転抽選器

商店街などの福引で使われる通称ガラポン(ガラガラ)ともよばれる抽選器。六角形や八角形の木箱についてハンドルを回転させ、内部の球体が無作為に1つ出てくる仕組み。正式名称は「新井式回転抽籤器」。この抽選器は内部の球が見えるつくり。



謝恩券

(宮園市場 昭和35年以前か)
宮園市場にあった精肉店から出された謝恩券。市場は現在の中央2丁目にあつたと思われる。

包装紙・
マッチコンクールの展示
(区役所 昭和32年)

包装紙やマッチは、店のイメージともつながる重要な販促ツール。昭和30年代になると接客・包装技術の講習会、商店コンクールや包装紙・マッチのコンクールなどがおこなわれた。



(昭和5年頃
丸山新光堂)

中野駅北口大通りや新井の商店の双六。絵双六は手軽な娯楽としてさかんにおこなわれ、店や商品を載せた双六は景品として配られた。あがりには新井薬師。呉服店、履物、足袋、小間物が描かれ、大正時代から花街が広がった新井薬師門前ならではの店があつたことがわかる。